

【研究発表】

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争——修行論を中心に——

庵谷 行遠

浄土真宗の學僧である大心海義教（一六九四〜一七六八）は、日蓮宗の僧、蓮華院日題が著した『閑邪陳善記』における浄土真宗批判に對して、『浄土真宗論客編』を記して反駁を加えた。また『浄土真宗論客編』に對して、法華宗の遠壽院日珠（光圓院日相）は『決權實義』を著して反駁し、さらに義教が『論駁行藏錄』を記して對抗するという應戰を繰り返す流れとなった。本発表では、義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争について検討する。特にその主題として、修行の問題に注目する。

珍海撰『決定往生集』に見られる凡夫性の自覺について

成瀬 隆順

浄土教における凡夫性の自覺について論ずる時に、鎌倉期以降の浄土教者達は唐の善導（六一三〜六八二）が著した『觀無量壽經疏』散善義の「二種深信釋」の文を依用する。これに對し、平安時代後期に東大寺東南院で三論・俱舍・法相などを學び、浄土往生を宣揚した珍海（一〇九二〜一一五二）は、その撰述『決定往生集』ではこの説を用いず、善導撰述『往生禮讚』「三心釋」中の「深信釋」に見える同趣旨の文を活用した。そこで本発表では珍海の意圖を解明し、他の浄土教論師や三論の先學との思想的關連を検討したい。

六朝道教上清派再考

廣瀬 直記

従来の六朝道教研究において、上清派や靈寶派という學術用語は、多かれ少なかれ恣意的に使われてきたように思われる。そこで本発表では、とくに上清派という用語のもつ問題点を指摘すると同時に、かりにその用語を使わなかった場合に、これまで上清派と呼ばれてきた人々を、どのように位置づけ直すことができるのかを問うてみたい。具體的には、六朝後期における上清の儀禮や戒律に關する文獻を整理しながら、その擔い手となった人々の思想や營みを、上清派という前提をひとまず措いたうえで明らかにすることを試みたいと考えている。

會澤正志齋の『論語』解釋について

大場 一央

本発表は、會澤正志齋（一七八二〜一八六三）の『論語』解釋が、彼の思想全體の結構に果たした役割を明確にすることを目的とする。この作業を通じ、會澤が儒教の最大公約數となるいくつかの條件を規定することで儒者の學派對立を解消し、各學派の個性を共存させつつ、結集して國體を護持し、當時の現實問題に取り組むための場の創出を目指したこと、更に言えば、注釋で自己の主張を展開したり批判を應酬するという學術・言論活動を減殺し、儒者の精力を、生活と政治における實踐行爲にのみ集中させようとしたことを明らかにしたい。

大衆部における自己認識論の形成過程の考察

飛田 康裕

部派佛教の内、説一切有部は漢譯として一連の論書を伝えるのに對して、大衆部の類書は殆ど形跡をとどめず、その教理も断片的にしか知られない。これに關しては、この自己認識論（智がその智自體を知りうるとする議論）も例外ではないが、幸いにも説一切有部の論難を通して、その概要を垣間見ることができるとする。本発表では、説一切有部の資料より推測しうる大衆部の自己認識論の目的とその形成過程のモデルを提示しようと考えている。

江戸時代の「道士」谷口一雲の道教講義——老子傳・金丹道など——

坂出 祥伸

江戸時代中ごろ谷口一雲なる人物が江戸吳服橋あたりで老子傳と道教金丹道の講義をしていた。その資料が天理圖書館に所藏されている。『史記』「老莊申韓列傳」ではなくて「玄妙内篇」などによる老子傳、道教では白玉蟾の「修仙辨惑論」、『石函記』『規中指南』などのみならず、古道教經典『度人經』などにも及んでいて、かなり程度の高いものであったと推測できる。これらの講義内容の一端を紹介し、不明の點についてご教示を仰ぎたい。

【講演】

歴史のなかの伯夷叔齊

吉川 忠夫

殷の紂王を討伐した周の武王に抗議し、周の粟を食らうことを潔しとせずして管陽山に隠れ、遂に餓死した伯夷と叔齊。『論語』に「不降其志、不辱其身、伯夷叔齊與」（微子）とあり、『史記』伯夷列傳に「積仁聚行如此而餓死」とあるなどを始めとして、清廉な節義の人物というのが伯夷と叔齊に對する評價の最大公約數ではあるけれども、しかしながら肯定的評價ばかりに終始するわけではない。二人についてのイメージや評價のさまざまなぶれを中國の歴史のなかで概観してみたい。